

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

あめんぼう水の面押し軽さかな

大川 節弥

(評)あめんぼうは夏になると、池沼、小川などの水面を六本の細く長い脚で軽く体を支えて、スイスイと走っている。陸上を飛ぶこともできる。その臭い(にお)が飴のようだというところから、この名がついたのだろう。虫を研究している学者の間には「川ぐも」とも呼ばれ、地方によってはこの蟲を「水馬」みずすましとよんでいるところもあるらしい。

所望するお茶一服の夏座敷

片岡 包女

(評)短い言葉の中に、作者の情感・気品・風格がにじみでている。静かで、技巧を凝らさず、語感が確かである。抑制のき

いた表現に格調を見せている。

梅雨空に晴れぬ心を映す雨

秋田 律子

(評)四季の中で、もっとも印象が不鮮明な「梅雨」という季節を選んだ、作者の独自性、この重々しい自然観照は、作者の生活を離れては決して生み出せるものではないし、説明もできないであろう。

季節は梅雨でも、何時かは晴天の日もあるだろう。この一句には作者の諦観のひびきがこめられている。この重々しい自然観照、そこに感傷のあとを残さないとここに惹かれる。

賑に親子三代花火かな

森岡 照月

(評)親子三代は、祖父母、父母と、その孫たち、寄りそって花火をたのしんでいる。気兼ねも遠慮もいらぬ身内どうし、仕掛け花火、線香花火、手持花火等夏の短い夜は、意識しないままに、いつしか更けてゆく。

近道を消したる草の茂りかな 間 浩太

玄関の客をもてなす団扇かな 中野 好子

大豆苗植えて夜来の雨の音 川村 博子

窓にある一コマずつの梅雨景色 刈谷 志津

暮れなずむ空に明るし合飲の花 津田 久美

大瑠璃のこえかと渾身耳とせり 井上 郁子

槍一本長押にかかる夏座敷 友草 水月

反論も妥協もせず単衣着る 伊藤 たみ

窓拭いて空高くする梅雨晴間 岡本とも子

百枚の青田も己が色を持つ 竹崎 光子

わが里は老鶯の声終日(ひまがら) 筒井 正子

ホテル舞う闇をとぼして水車あと 弘瀬うき子

みどり児もその母も寝て夏座敷 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

ダイオト母の口ぐせ明日から

伊野小6年 植村 風音

夏が来たみんなの肌は夏の色

川内小6年 古谷ひなの

スピードを落としていう交差点

伊野小5年 福田 涼晴

大切だ人と人の思やり

伊野小5年 弘井 双葉

お日さまはみんな笑顔にしてくれる

伊野小5年 野村 菜月

音楽は心と心のハーモニー

伊野小5年 加地 茜

風鈴はやすらぐ音をかなでるよ

川内小5年 松本 七海

家庭科で上手に作る 目玉焼き

川内小5年 溝渕 弘哉

おりづるに平和ねがっておいく

川内小5年 山本 貴子

ゆかたきてみんなでおまいり 輪ぬきさま

川内小5年 埜 充希

むぎごはんかめばかむほどおいしいな

伊野小3年 田村ゆうき